

陶磁器を鑑賞するのに最もふさわしい正面性があるのは、確かにあります。それが、そのものは総体として現われてくるのである。それでの鑑賞面の具体的な要素を分析的に抽出したとしても、その全体像を表現することは不可能なことである。まず平面の作品以上に密度の濃いイメージが作品と鑑賞者との間に現れ、次にこの「存在」の現象に立ち会うことこそが、鑑賞者にとって至福の時であり、まさに忘我的境地において、芸術作品と対峙することなのである。

(館長
出川哲朗)

やきものの芸術学 8
陶磁器を鑑賞するのに最もふさわしい正面性があるのは、確かにあります。それが、そのものは総体として現われてくるのである。それでの鑑賞面の具体的な要素を分析的に抽出したとしても、その全体像を表現することは不可能なことである。まず平面の作品以上に密度の濃いイメージが作品と鑑賞者との間に現れ、次にこの「存在」の現象に立ち会うことこそが、鑑賞者にとって至福の時であり、まさに忘我的境地において、芸術作品と対峙することなのである。

我々は油滴天目茶碗の器の表面を観察し、鑑賞しながら、実は器そのものを出現させている「存在」を感じ得るのである。

立体制形芸術であると考へれば、鑑賞者が好みの角度から見ればいいともいえる。しかし、芸術作品をとらえるときに、立体制形の総体として見ていくのがいいのか、正面性を考慮してその視点から鑑賞するべきなのかは、問題であろう。また、伝統的にもつとも美しく見えるとされている角度から鑑賞するということも二つの見方かもしれない。

油滴天目茶碗を様々な角度から鑑賞するには時間の経過を必要とする。ある瞬間にはひとつめの面からしか見ることができないからである。この鑑賞の不自由さを乗り越えて、立体物の全貌を感じることによって、「存在」が現われて来るようと思われる。

立体制形芸術であると考へれば、鑑賞者が好みの角度から見ればいいともいえる。しかし、芸術作品をとらえるときに、立体制形の総体として見ていくのがいいのか、正面性を考慮してその視点から鑑賞するべきなのかは、問題であろう。また、伝統的にもつとも美しく見えるとさ

れている角度から鑑賞するということも二つの見方かもしれない。

油滴天目茶碗を様々な角度から鑑賞するには時間の経過を必要

とする。ある瞬間にはひとつめの面からしか見ることができないからである。この鑑賞の不自由さを乗り越えて、立体物の全貌を感じることによ

りて、「存在」が現われて来るようと思われる。

立体制形芸術であると考へれば、鑑賞者が好みの角度から見ればいいともいえる。しかし、芸術作品をとらえるときに、立体制形の総体として見ていくのがいいのか、正面性を考慮してその視点から鑑賞するべきなのかは、問題であろう。また、伝統的にもつとも美しく見えるとさ

れている角度から鑑賞するということも二つの見方かもしれない。

油滴天目茶碗を様々な角度から鑑賞するには時間の経過を必要

とする。ある瞬間にはひとつめの面からしか見ることができないからである。この鑑賞の不自由さを乗り越えて、立体物の全貌を感じることによ

りて、「存在」が現われて来るようと思われる。

展示室から

4月10日(土)～7月25日(日)

企画展

「高麗時代の水注」

水や酒などの液体を注ぐための器——水注。その典型的な形は、胴の上部に口が開き、胴の側面下部から細長い注ぎ口が伸び、その反対側に把手が付く、というものです。高麗時代(918～1392)には青磁を中心として多くの陶磁製水注が作られました。中国から伝わった水注は、繁栄する仏教や生活様式の変遷のなかで12世紀を中心に多彩な展開を遂げ、とりわけ植物を模した形や文様に高麗独自の美しさを見せます。さらに高麗水注は中国や日本でも高級品として受容されました。

青磁象嵌童子海石榴華文水注(表紙)は、海石榴華文の周囲に唐草の蔓と、それをよじ登る童子を配し、男子誕生への願いを込めているようです。輪郭を黒象嵌で表し、その背景を白土で埋め込む逆象嵌の技法が、文様を一層際立たせています。青磁陽刻筍形水注(写真上)は、筍形を模した水注で、筍はその成長の早さから子孫繁栄を象徴します。中国には見られない造形で、胴部にはち切れんばかりの生命力を感じさせます。

本展ではこうした高麗水注を、館蔵品を中心に約30点展示します。基本的な構造はそのままに、様々な変化を見せながら愛好されてきた水注。その洗練された姿の数々を、本展でお楽しみ下さい。(E.J.)



特集展

「中国陶磁の美」

英文のchinaが陶磁器を表す一般名詞であることに象徴されるように、中国は東アジアのみならず世界的なやきもの王国といえます。悠久な中国の歴史同様、中国陶磁も長い歴史を有し、各時代、各地域で特色あるやきものがつくられてきました。

本展では近年の新収蔵品などを含む寄贈品約20点により、中国陶磁の多彩な魅力をご紹介します。各寄贈者の好みを反映したバラエティに富んだ作品を通して、中国陶磁の美の世界をご堪能下さい。(H.K.)

写真上：青磁陽刻筍形水注
高麗時代・12世紀
高：22.5cm Acc.No.20401(住友グループ寄贈)

写真下：五彩龍文壺(「大明萬曆年製」銘)
明時代・万曆年間(1573～1620) 景德鎮窯
高：40.0cm Acc.No.12720(安宅俊夫氏寄贈)

次回展示予定：

平成22年8月7日(土)～11月28日(日)
国際交流企画展「南宋官窯の謎」
—杭州老虎洞窯址発掘成果展(仮題)
特集展「高田コレクション ヘルシンクの陶器
—オリエンタルの色彩とデザイン」

「ルーシー・リー展」は12月11日から当館に巡回いたします。(S.S.)
ボランティアの窓

◆ 安宅英一氏は音楽の分野にも造詣が深く、ドイツ系ピアニストのアウトワール・シュナーベルとの交流の逸話が残されています。安宅氏はこのピアニストの真髄はフランツ・シューベルトにありといっています。一方、音楽爱好者はこの巨匠はベートヴェンが得意分野であるとしていますが、むしろ夭折したシューべルトがその薄幸の生涯において、当時の不遇であった青年たちの感情を等身大に捉えた作品が、巨匠の演奏スタイルに合っていたものと思えます。安宅氏は他の演奏家にはない独

編集後記

◆ 最近、20世紀イギリス陶芸の巨匠たちの展覧会が続いています。開催中の「ハンス・コバーエ展」(滋賀県立陶芸の森陶芸館)や、4月28日から始まる「ルーシー・リー展」(国立新美術館)がそれです。ロクロで成形されたりやコバーエの作品は、都会的なデザイン性に富み、空間を意識した緊張感を放ち、特にリードの瑞々しい感性は多くの人をひきつけてやみません。

展示のおしらせ
4月10日(土)～7月25日(日)

◆ 企画展「高麗時代の水注」

◆ 特集展
「中国陶磁の美」

◆ 平常展
安宅コレクション中国・韓国陶磁
李秉昌コレクション韓国陶磁・日本陶磁
沖正一郎コレクション鼻煙壺

◆ 休館日：月曜(5/3、7/19を除く)、5/6(木)、7/20(火)

友の会通信

2010.4
No.93

ASSOCIATES NEWS
THE MUSEUM OF ORIENTAL CERAMICS, OSAKA



重要文化財 青磁象嵌童子海石榴華文水注
高麗時代・12世紀中葉
高：19.0cm Acc.No.20286(住友グループ寄贈)

「宋代宮廷生活における 汝窯と官窯青磁」

第72回講演会要旨

上海・復旦大学文物與博物館學系副教授

劉

朝暉



Fig.1
青磁梅瓶片
北宋時代・11世紀末～12世紀初
杭州市文物考古所蔵



Fig.2
青磁方壺
北宋時代・11世紀末～12世紀初
河南省文物考古研究所蔵



Fig.3
青磁壺
北宋時代・11世紀末～12世紀初
河南省文物考古研究所蔵

宋時代のやきものの最高峰は、汝窯と官窯青磁です。それまで越窯などは翠緑色の緑がかった釉色でしたが、汝窯は中国青磁史の中でも天青色という青みがかった釉色を初めて出現させた点に大きな意味を持ちます。汝窯や南宋官窯は古代の文献に記載が残されています。南宋の葉實の書いた有名な『坦齋筆衡』には、「元々宮廷は定窯の白磁を使っていたが、ある時から汝州に命じて青磁を焼かせた。汝窯は近隣の諸窯に対して魁となって、質の高いものを作った。」「北宋の政和年間に、京師に窯をおいて焼成させた。」と書かれています。この「京師」は宮廷、または地名を表すと諸説ありますが、ここではこれを宮廷と考えると、宮廷が窯をおいて焼成させたとなり、これが北宋官窯となります。その後、北宋が金に攻められ、南に渡った南宋において置かれたのが修内司窯、それを内窯といいます。また、後に郊壇下にも新しく郊壇下窯を作りますが、こちらは修内司窯に比べると、やや質が劣るものだったとあります。こうしたことから汝窯以降、北宋時代に官窯が一つ、そして南宋時代には修内司窯と郊壇下窯の二つの官窯ができ、それが続いていったことがわかります。

1986年に西安で行われた中国の古陶瓷学会で、宝豊の工場長が工場付近で採集した破片を参加者に見せ、臨席していた当時の上海博物館の汪慶正館長がこれを重視し、すぐにその付近の調査を行いました。そして窯道具と青磁の破片を採集し、基本的にそこが汝窯の窯址であると認定することができました。1986年から8回の発掘が行われましたが、特に重要なのが2000年の第6次発掘で、初めて焼造地区が発見されたのです。

北宋時代の官窯は、もし京師を地名として解釈するならば、当時の都汴京（現開封）にあったことになります。しかし開封一帯では黄河の氾濫により、北宋時代の地層が地中深くに埋まっており、発掘調査をすることができません。そのため、北宋官窯は本当に存在したのか、汝窯が北宋官窯であったのかなど、北宋官窯に関しては現在の学術界でも様々な見方があります。

一方南宋官窯は北宋官窯に比べると、もう少しあつりしておらず、特に90年代以降に杭州の鳳凰山で発見された老虎洞窯の最近の調査では、「修内司」銘の窯道具が見つかっており、そこが修内司窯だという見方が出てきています。老虎洞の位置は、南宋時代の地図によると、皇城の付近に二つある修内司営の中間の萬松嶺にありました。その地理も文献の記載と合致し、また出土品自体も伝世品に非常に近いことから、老虎洞が修内司窯という説は納得できる点が多いと考えられます。もう一つの郊壇下窯はかなり早くに発掘され、窯と様々な工房の遺跡も見つかって現在南宋官窯博物館として保存されています。

こうした汝窯や官窯の青磁は宮廷用に作られたと思われます。南宋時代の知識人である周密の『武林旧事』の記述に淳熙6（1179）年、皇帝と皇后が皇城内の聚景園に行幸した時に、様々な花瓶が並んでおり、その中に天晴（天青）の汝窯の金瓶があったという記述が見られます。また、同じ『武林旧事』に紹興21（1151）年に南宋の高宗が、清河郡の王である張俊の邸に行幸した時に皇帝への献上品の中に、「汝窯酒瓶一对、洗一、香炉一、香合一、香球一、蓋四」の記載があります。この記述から、汝窯には様々な器形があったことがわかります。

またこの数年、杭州の南宋皇城中の汝窯や官窯の出土品をみると、太廟（皇帝の祖先への祭祀のための廟）からは官窯の鬲式の香炉や盤の破片が出土しており、恭聖仁烈皇后の邸宅跡の庭園の池の遺構からも、南宋官窯の破片が89点、汝窯は梅瓶の破片が1点発見されています。この恭聖仁烈皇后は南宋の寧宗の皇后楊氏であり、歴史上、芸術史上でも有名な女性です。その生涯や出身については謎の部分もありますが、絵画に長けており、書画の鑑賞にもすぐれていました。杭州の皇城遺跡から南宋官窯や汝窯が出土したのはこの2カ所の遺跡だけですが、今後さらに多くの発見があると期待しています。

器物に刻まれた銘をみていくと、汝窯では天青釉盤（北京故宮博物院蔵）の底部に「壽成殿皇后閣」という銘が刻まれています。同じ「壽成殿」の銘が英國のピクトリア・アンド・アルバート美術館にある汝窯の蓋托にみられます。この宮殿名は史書の中には記載が見られず、一部の研究者は壽成皇后（高宗の皇后謝氏）と関係があると考えています。また汝窯の中に「奉華」銘のある作例がありますが、この銘も学界で議論されるものです。乾隆帝の『御製詩四集』に汝窯奉華盤を詠んだ詩があって、その註に「奉華」は南宋の高宗の劉貴妃の号であると述べられているので、この銘は劉貴妃に関連がある可能性があります。しかし、清時代に刻まれたものではないかという一部の研究者の意見もあります。ただ、杭州の皇城遺跡から出土した「奉華」の定窯白磁片と、台北故宮博物院の汝窯奉華盤の銘を比較すると、書体の特徴が似ているので、私は南宋時代でいいのではないかと考えております。もしそうであれば、南宋宮廷と関連する銘のある作品が前述の2点とあわせて汝窯では3点あることになります。

南宋官窯では杭州から「玉津園」銘のあるものが出土しています。この玉津園というのは南宋の皇城内にあった高宗が造った皇室専用の園林です。元々は北宋の都にも同名の皇室用園林があり、皇帝はこの玉津園で狩りや宴会などを好んで催し、宋代の文献にもしばしば言及された重要な園林です。また、台北故宮の天青釉蓮弁文盤には「殿」字銘があり、同じ銘の定窯白磁が杭州から出土しています。『宋史』によれば、宋が南下して高宗が臨安府を作った際に、宮室の制度を省略化し華美な装飾を好まない方向に変わりました。また、用途によって多くの宮殿は臨機応変に名前を変えたため、宮廷が工人にあえて具体的な宮殿名ではなく「殿」と刻させて、様々な宮殿の統一名称としたと考えられます。また杭州市内で発見された南宋官窯の青磁碗には「内殿」銘があり、これは皇城の奉華殿を指します。また南宋の高宗が讓位後に過ごした宮殿である「德壽殿」

の銘も見られます。德壽宮の規模は皇城に相当するほど大きく、その配置も皇城と非常に似ており、当時の人々は皇城を大内あるいは南宮と呼ぶ一方、この德壽宮を北内、あるいは北宮と呼んでいました。「德壽」、「德壽公苑」、「德御」などの銘があり、南宋官窯以外にも杭州では定窯白磁で「苑德壽」銘も発見されています。そのほかにも「坤」字銘の碗の底部の一部も発見され、これはおそらく坤寧宮の官器廠ではないかと思われます。坤寧宮は皇后の居住した宮殿であり、吳自牧の『夢梁錄』には皇太后殿のことを坤寧宮と称すという記載も見られます。そのほか「苑」字銘や、太后殿を指すと思われる「太后口」銘、「皇太后殿」銘などが見られます。その中でも「口寧殿」銘の破片は焼成前に銘が施された数少ないものの一つです。このように、遺跡から出土して宮廷と関係があると思われる銘から、太皇や皇太后、園林など様々な宮殿で使われていたことがわかると思います。

次は器形から宮廷の日常生活が、どのようなものだったのかみますと、汝窯、南宋官窯を問わず、しばしばみられるのは碗、盤などの飲食器です。有名な汝窯の蓮弁形碗（台北故宮博物院蔵）は温碗と考えられるものです。宋時代に模写されたと思われる「韓熙載夜宴圖」を見ると机の上に蓋托と水注が入った温碗が見られます。そのほかには香道具関係のものが多くあります。前述の『武林旧事』に記載された汝窯の十数点のうち、そのほとんどが香道具でした。そうしたことから、当時香を焚くという文化、習慣が流行していたことがうかがえます。宋時代有名な除競の『宣和奉使高麗圖經』には、獅子のような獸の口から香を焚いた煙がでる仕組み、出香という記載が見られます。また宋時代の文献に皇帝が宴会を催す時に「出香金獅座」という記載があり、獅子形香炉である可能性が高いと思われます。陸游の『老学庵筆記』には金製の蓋付きの香炉、獸形の香炉が記載され、これも、おそらく獅子形香炉の可能性が高く、このように出香は主に宮廷の中で頻繁に使われていたことがわかります。北宋の徽宗が描いたとされる「鳥禽図」にも香炉が描かれ、また前述の『武林旧事』淳熙6年の記載の献上された汝窯の大壺、小壺もおそらく畜形の香炉であったと思われます。

また当時の花を活ける文化、風習によって、花器も文献や絵画に多く見られます。『武林旧事』に「天晴汝窯金瓶」とあり、おそらく花瓶の類だと思われます。梅瓶は宋時代に経瓶とも呼ばれていたことが、いくつかの文献からうかがえられます。これは大胆な仮説ですが、この汝窯の「金瓶」というのは「金」と「経」の音が同じですので「金瓶」というのが「経瓶」、さらには梅瓶を指すのではないかと考えています。恭聖仁烈皇后の邸宅の池の遺跡から汝窯の梅瓶の陶片（Fig.1）が出土した例が、その証拠といえるのではないかでしょうか。池の中には石などで作った築山があり、汝窯の梅瓶は花瓶として使われていたのではないかと考えられます。また、この遺跡からは明らかに花を活けたとわかる花盆も出土しております。ただ梅瓶は、通常は蓋を伴った液体類を貯蔵するものであることを申し添えます。

最後に汝窯や官窯で青銅器を模した物があります。それがたして祭器、あるいは明器であるのか、陳設器と称す装飾用の器物であったのかについて考えてみたいと思います。既にこの問題について、杭州市文物考古所の唐俊傑氏の研究があります。南宋時代の陶質の祭器はどのようなものだったのか、その陶質の祭器の焼造と修内司官窯の関係など、また当時の祭器の在り方や、官窯が青銅の祭器の模作をする必然性が論じられています。これによると1999年に杭州市考古研究所が鳳凰山の老虎洞窯址の左側の大地で、南宋時代の小型の窯を発見しました。その窯の南側の廐棄坑からは、陶器や陶製の範が出土し、それには表面に青銅器を思わせる饕餮文や龍文、雷文などの文様がみられました。そのほかにも巖宮巷という南宋時代の皇城につながる街道の遺跡からも、類似した陶質祭器の高台が出土しています。1999年に発見された窯の位置は、南宋時代の皇城地域内にありますので、当然宮廷が管理していた窯と考えられます。また、郊壇下窯跡から出土した陶片は、当初は素焼きの製品と考えられていましたが、1999年の発見によって、これも陶質の祭器の範であることが明らかになりました。

礼制と祭器については『三礼圖』や後の『宣和博古圖』にありますように、祭器の形態は厳格に定められています。陶器の性質は土であり自然そのものでしたから、かえて祭器には陶器が好んで使われたと考えられます。陶器以外にも祭祀の種類によって、銅製、金銀、玉、漆、竹、木など様々な種類の材質が使われ、南宋時代の『女孝經圖卷』（北京故宮博物院蔵）をみると、簠、簋、豆などの様々な種類の祭器が使われ、またどのように祭祀が行われていたのかが理解できます。最新の研究や発掘成果を考慮しますと、今まで単に青銅器の模作と考えられていた汝窯や南宋官窯の陶質の祭器が、どのような意味を持ち、どのような形で使われていたのかを、もう一度考ねねばならないと思います。また、今回展示されている青磁方壺（Fig.2）と青磁壺（Fig.3, 4）は『重修宣和博古圖』（Fig.5, 6）に同様の器形のものが記載されています。ただ、今回実際にみると思ったよりも小さなものでしたので、こうした小形の物もたして祭器といえるのか考えなければならないと思いました。

汝窯でもこのような素焼きの陶製の祭器が焼かれていたことは、大きな問題だと思います。ただ、汝窯では青銅器を模した物は前述の円壺と方壺の計3点だけです。非常に少なく、畜形の香炉を除外すると、青銅器を模した作品はそれほど多くはありません。

一方、南宋官窯には青銅器を模した作品はいくつかあります。鬲形の香炉、觚、鼎、尊などがみられます。当時の絵画資料を見ると、花器として使われていたもの、あるいは書斎の装飾品、あるいは陳設器のようなものだったということがわかります。私はこの陶質祭器には非常に関心があり、今回この問題を提起したく紹介いたしました。



Fig.4
青磁壺
北宋時代・11世紀末～12世紀初
河南省文物考古研究所蔵



Fig.5
方壺
『重修宣和博古圖』記載



Fig.6
獸環壺
『重修宣和博古圖』記載



劉朝暉
1991年に復旦大学文物與博物館學系を卒業後、1998年には立教大学の奨励研究员を6ヶ月つとめ、2001年に復旦大学文物與博物館學系副教授となりました。中国古代陶磁史および東アジア陶磁交流史を専門とされ、2006年には復旦大学歴史学博士（中国古代史）を受けられています。近年、とくに明末清初の景德鎮青花磁器について、海外との陶磁文化交流など幅広い視点から研究されています。